

明治による免疫力啓発プロジェクト『Do Wonders』

免疫のメカニズムをアートで学ぶ体験型展覧会『君と免疫。展』
表参道に大行列！わずか2日間で4,000人以上を動員！！

株式会社明治（本社：東京都中央区、代表取締役社長：川村 和夫）は、お客様の健やかな毎日をサポートしたいという願いのもと、知っているようで実は知らない「免疫」のメカニズムを楽しく学ぶプロジェクト『Do Wonders（ドゥー・ワンダーズ）』をスタート。その第1弾として、2月24日(土)～25日(日)に「君と、免疫を、アートでつなぐ」をコンセプトにした体験型展覧会『君と免疫。展』を表参道・SO-CAL LINK GALLERYにて開催しました。



会場には、顕微鏡を覗き込んで視聴するコンセプトビデオを皮切りに、自然免疫が獲得免疫にバトンを渡すイメージを無数のバルーンを編み込んで表現したインスタレーション作品『bridge』や顕微鏡でも捉えることのできない細胞群をその機能や働きから想像して描き分けた超細密画『免疫幻想図鑑』、免疫による自己と非自己の識別をプログラムアニメーションで表現した体験型映像作品『混沌の王国』など、石井正信(イラストレーター)・清川進也(音楽作家)・勅使河原一雅(映像作家)・DAISY BALLOON(バルーンアーティスト)・吉田愛(建築家)の異なるジャンルのアーティスト5組が本展覧会の為だけに制作した「免疫」を題材にしたアート作品を展示。

珍しい展示作品の数々に、来場者は顔を近づけて凝視したり、熱心に解説文を読み込んだり、自身のスマートフォンで撮影してSNS上にアップしたりと思いつきの方法で楽しみました。「免疫というテーマ設定が面白かった」「免疫のことをもっと知りたくなった」「細胞の世界にワクワクしました」「自分の体に驚きました」など知的好奇心を刺激する内容が大好評で、本展覧会はわずか2日間の開催にもかかわらず小さなお子さんから年配の方まで延べ4,000人以上を動員。会場前には常に入場を待つ長蛇の列ができ、一時入場規制がかかるなど大いに賑わいました。

■館内の様子



① 外観



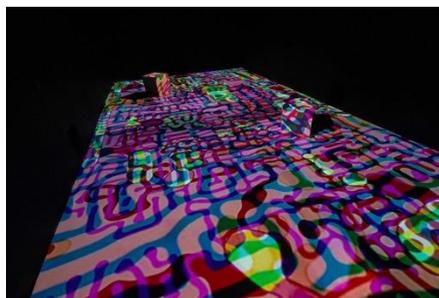
② 入口を入ると頭上にはバルーンアート(作:DAISY BALLOON)、正面にはコンセプトビデオを視聴する顕微鏡



③ サボテンと磁性流体を用いたインスタレーション作品(作:吉田愛)



④ NK細胞などの免疫細胞を想像して描いた超細密画11点(作:石井正信)



⑤ 会場奥の黒いカーテンの先に広がる体内に入り込んだかのような体験型映像作品スペース(作:勅使河原一雅)



⑥ 子供にも人気の高かった、自分で音を奏でることができる木琴自動演奏装置(作:清川進也)

■「君と免疫。展」概要

◎タイトル： 君と免疫。展

◎会場： SO-CAL LINK GALLERY (東京都渋谷区神宮前4-9-8)

◎会期： 2018年2月24日(土)～2月25日(日)

◎主催： 株式会社 明治

◎特別協力： 朝日新聞社、株式会社スイッチ・パブリッシング
医学博士 吉田たかよし

◎WEBサイト： <http://www.meiji.co.jp/do-wonders/> (Do Wonders)
<http://www.meiji.co.jp/do-wonders/exhibition/> (君と免疫。展)

◎Facebook

アカウント： <https://www.facebook.com/meijiDoWonders/>

※上記WEBサイトやSNSアカウントは予告なく取り下げる場合がございますのでご了承ください。

石井正信（イシイ マサノブ） | イラストレーター

1985年生まれ。イラストレーター、グラフィックデザイナー。静岡県出身。日本大学芸術学部デザイン学科コミュニケーションデザインコース(当時)を卒業後、デイリーフレッシュ株式会社に入社。2010年から株式会社カイブツに所属。芥川賞作家の平野啓一郎氏の毎日新聞での連載小説「マチネの終わりに」の挿画を担当。大胆な構図・モチーフを極繊細な線で描きあげる作品にファンも多い。

●展示作品タイトル『幻想免疫図鑑』

免疫についての文献を読み進めるうちに、そのひとつひとつが「個別の意思」を持った生物のように思えた。肉体の内側に広大な世界が広がり生命が溢れている、奇妙な感覚。そこで躍動する生物たちのイメージを紙に落とし込んだ。この生物の内側にもまた、広大な世界があるのだろうか。



清川進也（キヨカワ シンヤ） | 音楽作家

「拡張音楽」をコンセプトに音楽の新たな機能性を追求する音楽家。環境音を楽曲として再構築する音楽技法(サンプリング)を得意とし自ら映像撮影と録音を同時に行いながら収録した環境音素材による音楽映像作品を多数発表。2011年にはサウンドデザイナーとして携わった『森の木琴』がカンヌライオンズ国際クリエイティビティ・フェスティバルにて3冠に輝いた。

●展示作品タイトル『スパイラルリズム』

人間の体内で原子のメカニズムとして息づく、免疫。この存在を表現するために、もっとも原子に近い楽器は何かを考えました。その楽器とは、自然物を加工して生まれたものではないか。木琴という原始的な打楽器を用い、免疫という人の根本に、エネルギーを届けられないだろうか。木々を打ち奏でられるメロディには、人の免疫を活性するという明るい音楽がいいと決め、長調感の際立つ名曲、エルガーの「威風堂々」をセレクトした。



勅使河原 一雅(テシガワラ カズマサ) | 映像作家

1977年東京池袋に生まれた。はじめは母親と二人で過ごした。途中から新しい家族の家で過ごした。幼い頃から飲み屋を連れ回された。当時はホステスにもてた。登校拒否をしていた。家ではゲームをしていた。借金取りが怖くて泣きながら警察を呼んだ。父が居なくなった。小学校卒業。父が帰ってきた。父が死んだ。中学校卒業。日本橋服地加工工場に勤めた。音楽に夢中になった。中古のMacを買った。何人かのおかしな人に出会った。別れた。知らず悪い企画制作会社に入るがすぐ辞めた。いくつかの職場を転々とした。二一歳、デザインをすることが楽しくなった。やがて結婚した。子供が生まれた。離婚した。子供を引き取った。子供を育てる。Qubibiを屋号にして活動する。沢山のものを作りたい。

●展示作品タイトル『混沌の王国』

私と、私以外とが免疫により識別されているとしたら、その間には何があり、どのような光景を描いているのだろうか。ここでは免疫世界での自己・非自己における「境界」と、私が今まで見つめてきた「境界」とを、重ね合わせてみようと思う。



吉田愛 (ヨシダ アイ) | 建築家

1974年広島生まれ。2001年からSUPPOSE DESIGN OFFICE。2014年より谷尻誠と共同主宰。広島・東京の2カ所を拠点とし、インテリアから住宅、複合施設など国内外合わせ多数のプロジェクトを手がける傍ら、空間のディレクションやスタイリング業務も自らで行うなど、様々な分野の領域を横断しながら新たな建築空間の可能性を模索している。最近では東京事務所に飲食業態「社食堂」や不動産屋「絶景不動産」を開業するなど、活動の幅も広がっている。

●展示作品タイトル『無意識と意識が介在する庭』

感染した病原体を特異的に見分け記憶し同じ病原体に出会った時に効果的に排除する獲得免疫、受容体を介して侵入してきた病原体や異常になった自己の細胞をいち早く感知し排除する自然免疫。獲得免疫と自然免疫の二大システムの相互作用により病原体に対する防衛ラインを形成しているという近年の免疫学の見解もさることながら、私がもっとも興味を引かれたのは海綿動物から進化の過程に合わせ獲得した免疫システムが今この瞬間に体でおこっている感染症に対しオンタイムで自分の体内で作用しているという事実だ。

普段意識の外側にあるけれど実は人間を活かしている自然という存在に気付くことのおもしろさを、例えばインテリアは建築の一部であり建築は都市の一部であるというようにミクロとマクロの視点を横断しながら物事を考えることで無意識に意識を向ける、そういった普段建築を通して考えていることに置き換えて表現したいと思った。サボテンという静的な植物の中であぐめく細胞や生命力を、磁性流体という意思を持っているかのような液体を使って自然界にある有機的な動きや情報伝達というデジタルな動きで表現し対比させることで無意識を意識する気づきのきっかけのようなものになればと考えた。



DAISY BALLOON（デジーバルーン） | バルーンアーティスト

バルーンアーティスト細貝里枝とアートディレクター・グラフィックデザイナーの河田孝志からなるアーティストユニット。2008年結成以来、「感覚と質」をテーマに掲げ、バルーンで構成された数々の作品を制作。なかでもバルーンドレスは、繊細さが細部まで行き渡った建築物を思わせ、多くの人々を魅了している。また、彼らは日々、哲学的テーマを探求して、物や人とディスカッションすることをフィールドワークとしているが、その眼差しは常に、他者との本質的な融合に向けられている。

●展示作品タイトル『bridge』

私たち DAISY BALLOON は、体内の病原体に対して形成される「自然免疫」と「獲得免疫」という二つの防衛ラインを往来する樹状細胞に着目しました。樹状細胞とは、侵入してきた敵を発見し攻撃する「自然免疫」の形をとりますが、それよりも、主な活動は、あらたな免疫を生み出す「獲得免疫」の情報源としての架け橋のような役割だといいます。

このような架け橋という役割に瞠目したのは、生物が進化の過程で選びとってきた「自然免疫」と、日々進化する病原体の“いま”に対抗する「獲得免疫」の狭間に立ち、情報をパトンとして受け渡すという行為に共感したからです。人間が営む実社会の世界では、歴史が培ってきた生得的なもの、あらたに獲得される後天的なものは、多くの場合、反目されると考えられがちですが、免疫の世界は新しきものが古きものに、とって替えられるのではなく、たとえいずれかが結果的に淘汰の道を歩むとしても、お互いが協力し合い進化を遂げてきました。

私たちの活動もまたこうした二つの世界に跨って、橋のような役割を担いたいと考えています。バルーン・アーティストとして先人たちが築き上げてきた世界に敬意を抱きつつ、その外側にある世界に踏み出し、あらたな表現を実践していく。一度俯瞰して、異なる世界に触れて学ぶことで、認識を拡張し、もう一度あらたに世界を捉え直すことができるかもしれません。

乳酸菌は、生物が培ってきた歴史ある「自然免疫」を活かしながら、あらたな「獲得免疫」を呼び起こすことで、人間の進化を促しているように感じられました。つまり、それは生物が歴史的に培ってきたものへの敬意と、未来への挑戦の二つを同時に成し遂げることであり、過去と未来を“繋ぎ合わせる=bridge”のような働きと言えるかもしれません。どのような分野においても、進化の本質とは、もともと自分たちが所有しているものを活かしながら、新たなものを取り込み、再構築していくことでひとつの貢献をおこなっていく、そういうものだ私たちは信じています。

